

討 論 記 録

日向市文化資料館 玉城 玲子

本分科会は「地域史料の充実と住民・ボランティア」のテーマで、最も小さな地域社会である字を単位に、住民主体で将来に残す記録づくりが活発である沖縄と、市立の資料館が核となり、住民を巻き込んだ史料保存・普及活動に取り組む天草という、特色ある二報告を得て、活発な質疑がなされた。両報告を区別せずに、質問の出たところから進行されたが、記録の都合上、報告ごとにまとめて記すことにしたい。

まず中村氏の報告に対しては、群馬県立文書館の田中康雄氏から、沖縄における字誌づくりの先駆けともいえる、昭和初期に小学校を単位と主体にした「郷土史」について、編纂の目的、内容、郷土史の現在における保存状況についての質問があった。

中村氏は、地域の郷土教育運動の一環として取り組まれたもので、いわゆる地誌的な内容であること、地域の歴史資料、たとえば首里王府発行の辞令書などが少し翻刻して掲載されていること、その中には沖縄戦によって現文書が失なわれているものも多く、貴重な記録となっていることを述べられた。

次いで群馬大学の所澤潤氏から、字誌づくりに主体的に関わる人数の多さについて質問があった。学校教育にその土壌があるのか、あるいは沖縄は地方出版物が多く安価だが出版物が刊行しやすい状況にあるのか、関東の者には感覚的にわからない面があるとのことであった。

これに対しては、字誌をつくる人々は小学校卒業以来はじめて原稿用紙に向かうという方が主体であり、特に学校教育の影響ではない。隣の字でも作れたのだから、うちでもできるという感覚があると回答された。名護市史編さん室が作成した冊子『字誌づくり入門』の波及効果

もあるという。加えて中村氏は、字誌づくりは字全体の総会で決定され字の仕事として行われていること、字は風景として見える範囲が単位であり日々の生活圏で、字誌づくりに反対する人はだれもいない状況にあることを述べ、他地域とはコミュニティーとしての成り立ちの違いがあるのではないか、という見解を示された。

本多報告に対しては、まず有田町歴史民俗資料館の尾崎葉子氏が、毎日のチラシを保存していることに関して、具体的な方法を質問された。

本多氏は、地元の有力紙「熊日新聞」に入るチラシを一日ごとに日付を記した封筒にまとめてテンバコ(コンテナ)に入れ、一年で2箱ほどになること、館職員ではなく、清掃委託の方に頼み意欲的に取り組んでもらっていることを回答された。はじめて9年目だが、すでに他では得難い貴重な情報が蓄積されつつあるという。

品川区立品川歴史館の坂本道夫氏は、収集文書を市民が利用する場合の、館内のハード・ソフト両面のシステムについて質問された。

本多氏によれば、中西家文書については、私文書が多く、目録作成中のため公開は先の課題であるが、他の5件ほどの庄屋文書は、封筒に入り目録も出来ており、寄託資料の閲覧については、館の判断で公開しているということである。写真複写や掲載などは、所蔵者の許可を得た上で承諾する。公的な内容の文書は公開しやすいが、私的な文書は調査整理と目録作成をしっかりした上でなければ公開できない。場所については、以前は学習室や研究室もあったが、手狭なため展示室や収蔵庫になってしまい、現在は図書研究室を閲覧室として、他の目的と共用で使っていると答えられた。

これを受けて坂本氏は、品川歴史館の状況を報告された。品川では館蔵資料の情報提供を重要な仕事として位置づけ、館内に設けた郷土資料室に、展示準備に使った図書や収集資料を並べ、学芸員と区民が共有できる体制をとっているという。市民に何度も足を運んでもらい、館が地域文化の拠点となる上で、郷土資料室を重要視していると述べられた。

本多氏は、本渡市では市内の中高生の有志にジオラマを作ってもらい特別展示したことがあるが、資料提供の苦労はあっても効果が大きく素晴らしい仕上がりにあつた例を紹介された。館側がすべて用意し、さあどうぞと提供しても地味でなかなか見てもらえない。体験学習からさらに踏み込んで、展示まで参加してやってもらうことが、小さい地域資料館では一番効果のある方法ではないかと実感している。文書の整理・活用も同様で、天草史料調査会の動きも、今は他所からの参加が多いが、やがて地元の人々のネットワークを作ってもらおう方向にしたい。成果はもちろん、その過程に喜びや意義があることを、本多氏は強調された。

岐阜県歴史資料館の早野博之氏からは、岐阜県における女性史編集事業の中で、聞き取り調査のボランティアを公募し、編集のための文書整理にもボランティアが関与していることを紹介され、本渡市における地域住民への働きかけの方法について質問があつた。

本多氏は、ネットワークを作る上で、人件費のないところを手伝ってもらおうというだけでは難しいのではないかといわれた。大切なのはみんなにメリットがあるような形で、だから手間もかかるし、経費も逆にかかる。しかし動き出したら強い力を持って地域で動いていくという気持ちでいると話された。人を集める方向は二つあり、一つはすでに能力や経験のあるお年寄り、もう一つは今は学業や就職で天草を離れている若い人々を引っぱり込み、時々帰ったときには人材として活用する。お年寄りとお若者との二本立てを考えていると答えられた。

最後に神戸大学の奥村弘氏から、天草史料調査会の目録作成終了まで公開はしないという点について意見が出た。それでは中西家文書のよ

うな二万点におよぶ大量文書の公開までに時間がかかる。明治元年の庄屋選挙の入れ札など、特徴あるものが出て、所蔵者の了解を得られれば、部分的でもわかつたことから公表する。成果をできるだけ早い時期に地域に返し、一方で全国に向けて発信する。市民が文書を利用し資料的価値を高めながら目録を完成させるという方法も、ボランティアという新しい力を発揮させる場では大事ではないかとの考えを示された。

これについて本多氏は、天草史料調査会が始まるとき、まずメンバーから出されたのが公開の問題で、ニューズレターのような形でどんどん公表しようということだったと話された。しかし、天草のような小さな地域社会でそれをするには、たとえ明治初年といつてもなお生々しい問題をはらんでいる場合が多い。文書の内容によっては、早期公開できるものもあると返答された。

史料の公開については、地域住民・ボランティアが史料の保存と活用の担い手となる場合、調査着手の初期から問題となる場面も予想され、沖縄における記録づくりの現場にも間接的に関わると思われたが、時間の制約もあり、ここで閉会となった。

社会構造の変化にともない、地域の記録をいかにまとめ次の世代に残すかは急務の課題である。また事業への住民参加やボランティアは、高齢化社会に向けての生涯学習、学校でのこころの学習の必要性和相まって、いまや時代の大きな流れとなっている。一方、上からの要請によるそれには財政難による行革の思惑もからみ、複雑な問題をはらんでいる。本分科会のテーマは、今後引き続いての検討が期待される。